



## 浄土宗「上田明照会」の

## 社会福祉事業

社会福祉法人「上田明照会」は第一種社会福祉事業として、①精神薄弱児通園施設（宝池園）②精神薄弱者通所更生施設（宝池慈光園）③精神薄弱者収容更生施設（宝池月影寮）④精神薄弱者通所授産施設（宝池和順園）⑤精神薄弱者収容更生重度施設（宝池住吉寮）⑥母子寮（見誓寮）を営み、第二種社会福祉事業として、保育所（甘露園）を営む由緒ある社会福祉施設である。

この上田明照会は大正七年九月十九日設立されたもので、当時の仏教寺院は伝統的因襲の教義宣揚に努め、時機に応ずる法然上人の念仏による極楽往生の大精神が現実生活に生かされるべきである。このような

堅い決意に燃えた青年僧横内浄音師は小学校の同窓生等若い人十人あまりの協力援助をうけ、浄仏国土、成就衆生の信念により社会事業を創設することを決意をされた。

上人は大正六年三月宗教大学（現大正大学の前身）卒業されたが、当時学問研究にこれがれ、当大学の研究生として残るようすすめられていたが、寺の事情により学問を継続することができなかった。やむなく、長野の上田市呈蓮寺に帰り、学問を実践的に体験することによって仏道修行すること、仏恩に報ゆる道なりと悟り、上田市の繁華街に位置する浄念寺（現在の甘露園の隣）において同志相集り、社会浄化は子供からとの合意により、毎月一回欠かさず市

内の学童を対象にお話し会などを開催した。その結果子供達は言うに及ばず、父兄よりの希望もあって、大正八年一月廿五日子供会（日曜学校）の開設に至った。若い同志も希望に満ち、熱心に指導教化している中に、病氣の子供や、病弱な子供もいるので、同志の医師の協力を得て児童無料健康相談所を大正十一年十一月十七日より開始することになった。当時は生めよふやせの時代であったが、上田市全体としても乳幼児の死亡率が高く、両親の悲しみ、不幸を見るに忍びず、これの救済こそ、社会浄化であるとの合意に達した。丁度浄念寺は子育て観音の縁日が毎月十七日の夜行なわれるので、宮下弁覚医師、浅井敬吾医師が相談

員となって健康相談に応じた。毎年利用者は四百人から五百人に及び、昭和十五年頃には千人に及んだ。また、検診した乳幼児に対しては発育記録表を贈り、わが子の発育に対する親の正しい認識を持たせて、育児の合理化をはかった。

このように児童のしあわせは、社会のしあわせにつながることを体験したので、正しい育児を宣伝するため、健康児の審査会を開いて優良児の表彰を行なった。更に大正十四年四月に児童歯科相談所を開き、児童の健全は健康な歯より得られるものとして、毎月第三土曜日の午後を相談日と定め、嘱託医松原友四郎歯科医師が担当された。また同時に死産・乳児期の死亡は妊娠中における妊婦の健康状態に左右されることが多いので、毎月十一日及び二六日の夜を相談日として神津産婆さんの協力を得て実施してきた。このような児童及妊産婦に対する事業を行ってきたが、同志相集り相談の結果、児童がすこやかに育成されるのには、よい環境を作ることである。市街地は遊び場に困っていたので、地区の協力をえて浄念寺境内地に遊具、運動器具を設置

して遊園地をつくった。

このように児童問題に取組んでくると、当時は経済不況により低所得者は生活費を得るのに懸命で、乳幼児を抱えた婦人も屋外労働によって生活費を得なければならぬ状態であった。これら乳幼児を抱えた母親に代って面倒を見てやる施設が要求されていたので、上田明照会理事土屋和義氏が中心となって託児所の設立を企画し、恩賜財団慶福会の助成、県・市の補助、市内篤志家の協力によって大正十五年五月八日託児所甘露園の誕生となったのである。その当時の社会事情は幼稚園に通うものは上流家庭の子供で、託児所は貧乏な下層階級の子供が入る所というような観念であった。勿論制度としては婦人労働を保護するために子供を預る所であったが、当時は貧富の差が甚しく、階級差別がはげしかったため、社会問題が表面化したのであった。しかし、当園は幼児の頃から差別観念をいだかせないよう心掛けるとともに、有産階級の家庭の子供であっても、この条件に合うものは委託をうけ、仏の子として平等の慈悲をうける保育を実施している。

## 一年間の主題

4月 合掌聞法……入園、進級を喜び、園生活に親しもう。

5月 持戒和合……きまりを守り、集団生活を楽しまう。

6月 生命尊重……生きものをたいせつにしよう。

7月 布施奉仕……だれにも親切にしよう。

8月 自利利他……できることは進んでしよう。

9月 報恩感謝……社会や自然の恵みに感謝しよう。

10月 同事協力……お互いに助け合おう。

11月 精進努力……最後までやりとげよう。

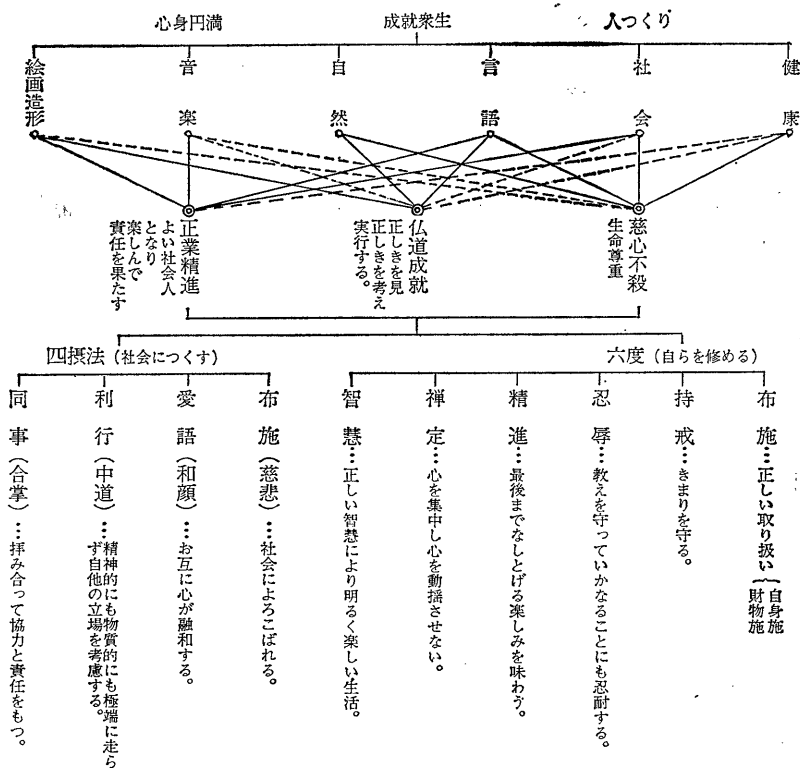
12月 忍辱持久……教えを知り、みんなで努めよう。

1月 和顔愛語……寒さに負けず、仲良く遊ぼう。

2月 禅定静寂……よく考え、落ち着いた暮らしをしよう。

3月 智慧希望……希望をもち、楽しく暮らそう。

# 年 間 保 育 指 針 甘 露 園



このように子供の立場から、婦人労働の問題を取り上げると、当時は経済不況の中で、中小企業の倒産による失業者、その他の理由により職に就けない人の救済方法を同志とともに研究することとなった。職業紹介所の窓口には失業者があふれ、仕事のない人はパン屑でその日を過す有様、彼等にルンペンという言葉が使われ、転々と移動し、方面委員の発行する無料宿泊券(上田市の場合)は日増に多くなり、急場しのぎの対策であった。ルンペンは救護に慣れて転落し、懶怠となり、自立心を失う傾向が見られた。更に生活難のため一家心中が新聞紙上に報道され、乳幼児を抱えて職にあふれる婦人のために昭和四年六月保育所の一隅に授産所を併設し、洗濯と布団の修理、雑布作り等の作業をすることになった。

また地域住民の集会の場や児童の集会堂の必要に迫られ、昭和十六年社会事業助成として恩賜財団慶福会よりの助成金、市内篤志家の寄附金、県外有志の援助金等により、花岡教幸氏が中心となって、社会館の建設に努め十二月に完成した。

このように時代の推移とともに児童を中心とした各種の社会事業が上田明照会によつて次第に発展拡張されてきた。すなわち、母子心中の多発により母子寮（見習寮）が昭和十年七月に建設され、戦後に至つて児童福祉法による母子寮として認可され、昭和三十四年九月一日には精神薄弱児通園施設（宝池園）の設置開園となり、さらに、精神薄弱者通所更生施設（宝池慈光園）が昭和四十二年四月一日発足し、翌四三年九月三〇日に精神薄弱者収容更生施設（宝池月影寮）を開設し、精神薄弱者通所授産施設（宝池和順園）を設置する等、精薄児及精薄者の施設により人間開発することができるといふ信念を以つて精進されてきた。

横内浄音上人の業歴は左の通りである。

昭和十四年七月十二日～十六年三月末日

浄土宗庶務部長

昭和十五年十一月十日

藍綬褒章受章

昭和三十四年～三十八年

浄土宗大本山増上寺執事長

昭和四十八年四月一日

浄土宗顧問

昭和二十七年～昭和三十四年

長野県保育園連盟副会長

昭和二十九年～昭和三十八年

長野県社会福祉協議会副会長

昭和三十一年～昭和四十七年

上田市保育連盟会長

昭和三十二年五月十八日

恩賜時計拝受、藍綬褒章版受章

昭和四十年十一月三日

勲四等瑞宝章受勲

これを社会福祉法人、上田明照会の事業を一覧表にすれば左の通りである。

#### A 本会の経営する事業

##### 一 児童福祉施設（保育所）

甘露園 園長 横内浄音

（目的）児童福祉法第三十九条第一項に

もとづき、日々保護者の委託を受けて、保育に欠ける、その乳

児又は幼児を保育すること。

（定員）三才以上一四〇名、三才未満四〇名、計一八〇名

（設立年月日）大正十五年五月八日

（規模）敷地面積一九七五・六五㎡

構造 鉄筋コンクリート、鉄骨

（定員）四〇名

木交一部 二階建一棟七七〇・

一三㎡

##### 二 児童福祉施設（母子寮）

見習寮 寮長 横内静雄

（目的）児童福祉法第三十八条にもとづき、配偶者のない女子又はこれに準ずる事情にある女子及び、

その者の監護すべき児童を人所させて、これらの者を保護すること。

（定員）一〇世帯

（設立年月日）昭和十年七月一日

（規模）敷地面積四八一・八㎡

構造 木造二階建及び木造平屋

建各一棟二〇一・〇一㎡

三 精神薄弱児通園施設

宝池園 園長 横内静雄

（目的）児童福祉法第四十二条の二項に

もとづき、精神薄弱の児童を日々保護者のもとから通わせて、

これを保護するとともに、独立

自活に必要な知識技能を与える

こと。

(設立年月日) 昭和三十四年六月一日

(規模) 敷地面積九七六・八 $m^2$

構造 木造平屋建一棟三七七・

二三 $m^2$

#### 四 精神薄弱者通所更生施設

宝池慈光園 園長 近藤三男

(目的) 精神薄弱者福祉法第十八条の二

項にもとづく、援護施設で一五才以上の精神薄弱者を日々保護者のもとから通わせて、これを保護するとともに、その更生に必要な指導及び訓練を行うこと。

(定員) 二〇名

(設立年月日) 昭和四十二年四月一日

(規模) 敷地面積五三四・六 $m^2$

構造 木造一部二階建一棟二六

七・四六 $m^2$

#### 五 精神薄弱者更生施設

宝池月影寮 寮長 近藤三男

(目的) 精神薄弱者福祉法第十八条の二

項にもとづく、援護施設で一五才以上の精神薄弱者を入所させて、これを保護するとともに、

その更生に必要な指導及び訓練を行うこと。

(定員) 三〇名

(設立年月日) 昭和四十三年九月三十日

(規模) 敷地面積一五七一 $m^2$

構造 木造平屋建一棟四〇三・

八四 $m^2$

#### 六 精神薄弱者通所授産施設

宝池和順園 園長 近藤三男

(目的) 精神薄弱者福祉法第十八条の三

項にもとづく、援護施設で一五才以上の精神薄弱者であつて雇用されることが困難なものを、日々保護者のもとから通わせて、自活に必要な訓練を行うとともに職業を与えて自活させること。

(定員) 二〇名

(設立年月日) 昭和四十五年四月一日

(規模) 敷地面積四三二・三 $m^2$

構造 木造二階建一棟三〇九・

二九 $m^2$

#### 七 重度精神薄弱者更生施設

宝池住吉寮 寮長 横内静雄

(目的) 精神薄弱者福祉法第十八条の二

項にもとづく援護施設で、一五才以上の重度精神薄弱者と老齢精神薄弱者を入所させて、日常生活に必要な動作訓練、感覚機能訓練を基調とした行動を通じての治療教育の立場にたつて、情緒の安定及び身辺の自立を図るとともに、できる限り社会生活に適應できる能力を養うよう、保護指導訓練を行うこと。

(定員) 男子三〇名 女子三〇名

計六〇名

(設立年月日) 昭和五十年四月一日

(規模) 敷地面積五九四・〇 $m^2$  建坪

一一三・二 $m^2$

構造 鉄骨平家建一棟 プロッ

ク平家建一棟

上田市中央北二丁目七番三号

TEL 上田(〇二六八二)

二二一〇七〇二  
二二一八九五八

〒三八六

社会福祉  
法人 上田明照会事務局

局長 務 台 義 秀

**B 昭和51年度収支予算総括表** (社会福祉法人 上田明照会)

名 称	予 算 額	前年度予算額	比較増減(△)額
法 人 会 計	7,342,000	8,203,000	△ 861,000
甘 露 園 会 計	45,697,000	37,531,000	8,166,000
見 誓 寮 会 計	7,648,000	6,871,000	831,000
宝 池 園 会 計	28,152,000	25,340,000	2,812,000
宝 池 慈 光 園 会 計	14,027,000	12,424,000	1,603,000
宝 池 月 影 寮 会 計	44,567,000	36,906,000	7,661,000
宝 池 和 順 園 会 計	8,230,000	4,557,000	3,673,000
宝 池 住 吉 寮 会 計	78,859,000	57,113,000	21,746,000
共同募金配分特別会計	2,759,000	1,885,000	874,000
計	237,281,000	190,776,000	46,505,000

## コメント

社会福祉法人、上田明照会は浄土宗呈蓮寺横内浄音上人（明治廿五年生）によって創立され、浄仏国土（社会環境の浄化）・成就衆生（青少年の健全育成）により福祉国家建設を目標にし、日々の生活に喜びを感じ、一日を精進のうちに過させ仏に感謝する信仰心は、単なる観念的なものであつてはならない。身内に燃ゆるが如き強い信仰は、必ず具体的な姿としてあらわれ、社会環境の浄化は児童の健全育成にその出発点を見出して発展してきた。

殊に毎朝六時、本堂において勤行されるのであるが、町の老人とともに声高らかに唱えられる読経は青年をしのぐ勢である。勤行が終ると本堂の畳の上で、老師の掛声によつてラジオ体操が行なわれ、心身ともに爽快となつて健康保持に努められている。これが終ると本堂の一室を改造した集会室に集り、朝の番茶を飲みながら親睦の座談が行なわれる。そのうちに全員集まつた所で、聖書（現代語の仏典及び共生法句集）を輪読し、人生の生きがいを味つていられる光景は実に心の美しい自然の姿であ

つた。

浄音上人のお話しによれば、人生悩みごと相談所を開き多くの人を教化しつつ、婦人会も活発に各種の運動を行ない、寺院としての現代的活動をされている。

宗教法人としての寺院の有り方はその任職の識見によつて色々の道があり、特に浄土宗としては社会福祉事業を経営している寺院は五百余に及び、教化活動を巾広く実施している面を考慮に入れば、寺院活動も社会福祉事業に貢献していることは事実である。

しかし、社会福祉事業の本質と現行の寺院活動とか同一性格のものであるかは疑問の余地がある。戦前行なわれてきた社会事業の本質は慈善事業、すなわち、物質的施与とともに精神面における救済という篤志家の熱意による行為であつた。それらの行為が制度的というよりも慣行的な流行行として各地において行なわれたということである。つまり、持てるものが衆智を集め、慈善行為として不幸な人、あわれな子供を善導する一方交通的な行為であつた。しかも、これらの不幸の原因が個人責任におい

て発生したものととして、取扱われてきた。

現代社会における諸制度は個人の責任とは無関係に悪結果を招来している。すなわち、四日市ゼンソク、イタイタイ病、騒音、汚水、悪臭等の公害は社会連帯責任によることは自明のことである。特に失業問題は自己個人の責任でなく、会社の倒産による責任はその経営者側にあるとしなければならぬだろう。また一面生活は文化生活として電気器具の発達、自動車の普及等消費面の増大は戦前の比ではない。その結果、収入の増大を計らねばならなくなり、若年層の労働は言うに及ばず、婦人労働の進出となり、児童生徒の育成にも悪影響を及ぼすこととなつて、個人的責任は全く見られなくなつてきた。根本的に社会問題としてクローズアップしてきた。

このように社会福祉の原点を見る時、仏教精神なり、仏教教理なりをどのように理解し、社会と対応してゆくかを考えねばならない。

「元来社会事業に対しては純真な燃ゆるが如き涙と血を持つ青年の気分が必要であるが、この意味で現在の仏教社会事業は少

しく物足りない淋しさを感じさせる。

仏教の進むべき道には何処迄も地上に人生の花園が育てあげらるべきであるから、それには雑草を抜きとり、良き苗種を育てあげるべきである。ここに於て本當の人生なり、仏国土・法界が育てあげられることが目標と見らるるのであるが、現代社会生活を見るに不安と空虚が感ぜられ、そして仏教と正反對な主張や争いが行なわれ、眞の社会生活が成り立つには縁遠い観がある。(中略)

社会事業におきましては、社会の荒波に迷へる浮沈の小船を保護救済する事も必要であるが、その荒渦をして平安ならしむべく全体の人生に対して全面的根本救済がなされるべきであり、さらに仏教の根本的使命があるのである。(中略) 仏教社会事業の本質として、仏教が淨仏国土成就衆生を目的とする限り、生きてない物をば生かし進むのが道であり、大いなる社会事業である。それを只特殊的な保護救済に止めるには、その根本使命を忘れ、不振を来すのである。眞の社会事業はそれを含むと共にその根本原因たる社会機構、社会生活、社会

思想の改善覚醒に研究努力すべきが重要である。(中略)

斯くて眞のめざめを根底とする社会事業の使命が明瞭になり、社会機構上に就ても工場問題、農村問題、労働組合農村組合に於ても、ただ組織に止まらず、それらの人々の人格を中心として国内における産業組織を改革し、国民生活の標準を中堅層において社会生活の改善と覚醒の促進に進むべきである。」(椎尾弁匡、現代仏教社会事業編昭和十二、六月号)

横内淨音上人は早くより椎尾先生に私淑し、共生主義による思想を持ち、社会教化をはかつてこられた。

淨仏国土の思想とは一体何であるのか、「仏教と政治」ということは、祭政一致とか政教分離という歴史的諸現象からも推測できるように、一見したところ相互に交錯しているともいえるし、一方では、出世間と世俗というように次元を異にした別々のパラレルなものとし理解されているようでもある。仏教が超歴史性と歴史的社會性という相矛盾したような二面性を同時に併わせ持っている、ということがこのような異な

った二つの見解を可能ならしめている原因であろうかとも思われる。(中略)

また古代におけるインドや中国の国家形態からみても判るように、政治論は國王論であり、為政者ある國王のありかたを論評したものである。(中略) 一つの時代でも、仏教徒の願いが、正法護持、令法久住ということにあり、仏道の実践の目的が正法の實現ということであるから、そのことの歴史的社会的展開として、いま挙げたような形をとることも当然であるといえよう。(中略)

しかし、仏教の展開が現実の人間の具体的な日常生活から出発するにしても、その理念を超世俗的な世界に求めているのであり、個人の内面的な自覚にその根拠をおくのであって、時間と空間を超えた生命の根源というような形而上的なことがらを体系化した世界観や人生観を基盤とするものである。したがって、いかにしても、世俗からは超越的でありながら、しかも個人的な自己自身の問題として内在的になりがちである。」(水谷幸正、淨仏国土思想について—日本仏教学会年報第三十七号)として社



会と仏教とを説明され、更に「仏教と社会福祉」について「人間の主体的な体験である宗教と、経験科学である社会科学のうらづけられる政治とか社会政策とは、一見したところ種々の相違が認められる。たとえば、宗教は、(一)人間と絶対者との関係であり、(二)人間が仏に成り、神が人間を救い、(三)知性を超えた体験の領域であり、(四)人間社会で解決不可能なときに求めるものとされており、(五)自己の心を淨め調えることであるが、政治は、(一)人間と人間との相対的な関係であり、(二)悪い状態の人間社会がより良い人間社会になることであり、(三)人間の知性によつて理解し得るメカニカルな領域であり、(四)人界の世界で解決するものであり、(五)社会生活全体の発展、人類の福祉をめざしているものである、ということなどである。しかしながら、いまここに列挙したようなことがらも、やまや皮相的な近視眼的見かたにすぎないのであって、共にこれ人間の文化現象である、と見るかぎり、人生の根源とか、人間の行為の根底において、両者に本質的なつながりを認めずにはおれない。」(中略)

社会国家の福祉とか人類の福祉というようなことを考えらる場合に、仏教における目標として、すぐに「淨仏国土成就衆生」という術語が想い浮かぶのである。仏教実践の方向は、この淨仏国土成就衆生に判つきりと明示されているといつてよいし、大乘仏教の根本理念であるときえいえる」(前掲書三三―三六頁)

このような考え方が、仏教全体に普遍化しているものである。しかしながら、社会福祉そのものは人間の幸福とか救済事業とかいう単純な事柄ではない。社会科学としての一学問として位置つけるのには、(一)社会は個人の集まりから成り立ちながら、それらの個々人から相対的に独立して存在する一つの客観的實在であり、それがまた逆に個々人を規定していくものである。(二)人間の生活は自然的に規定されると同時に社会的(歴史的)に規定せられる。それゆえに人間であることは、そのまま歴史的・社会的であるということである。(三)社会体制の相違や社会の発展段階にに応じて、それぞれ独自の社会法則(歴史法則、社会・経済法則)が支配している。したがつてこの法

則にもとづいて、社会と人間の問題を分析・解明しなければならぬ。社会科学の法則によると、資本主義社会にはそれ独自の社会法則がある。たとえば、窮乏化法則(労働者の貧困化に関する社会・経済法則)である。さまざまな現象や形態をとつてあらわれる社会的諸問題は、これらの社会法則にしたがつて理解し、その解決の方向と方法を見出すのでなければならぬ。」(孝橋正一、仏教と社会の諸問題二九九―三〇〇頁)

更に孝橋正一氏は「社会を観察・理解するためには、それに照応する科学、いまの場合、社会科学の知識、理論と法則が必要となった。そして仏教それ自身は個人の内面的自覚の成就・完成のために無限の努力の積みかさねを要求すると同時に、自己同一的にその努力の對象的外化を要請しているものなのである。この仏教原理の指示する一つの欠くことのできない側面である對象的外化のさいに、正しい指針をあたえるものが社会科学にはかならない。それゆえに仏教的であるということは、すぐれて内面的自覚の透徹であるとともに、自己同

一的にすぐれて正しい歴史的・社会的実践の貫徹でなければならぬ。これが仏教と社会との真に正しい結び合いであると言えよう。」(前掲三〇〇頁)

ここに特に注意されていることは、「仏教の特徴としての人間の内面的自覚の成就・完成ということは一種の心理的・意識的転換の課題であって、そのことによつて客観的実在としての対象の世界にはならぬ変化もおこっていないのである。」(中略)しかしひとしほしばしば、この内面的自覚の論理をそのまま対象の世界にまで不当に拡大適用したり」(前掲書三〇一頁)することとは避けなければならない。

このように仏教を正しく理解することにも、社会福祉を社会科学として、人間生活をありのまま、現実的に把握しなければならぬ。すなわち、仏教の教化事業は個人の内面的変化をはかることであり、社会福祉事業は個人の内面的自覚とともに、真の人間生活の本質を歴史的、社会的実践として理解し制度の一環として位置づけることである。

(文責 仏教大学教授 恒川武敏)

### 秦 隆真先生追悼論文集刊行について

仏教大学名誉教授、秦隆真先生ご遷化され早や一周忌も過ぎました。先生は余り多く語らず不言実行の人として、五十余年の永きに亘り、社会福祉事業に専念されてきました。すなわち、保護司・教誨師・民生委員及び社会福祉の学生を教育し、或は地区社会福祉協議会活動並びに児童福祉法による養護施設平安養育院の経営等に顕著なる足跡を残されてきました。更に、仏教大学に社会福祉学科を創設されたり、総本山知恩院の顧問会長として活躍されてきました。

先生ご生前中に本学内外の有志相集り、先生の「喜寿記念」の論文集を刊行する計画でありましたが、突然ご病体悪化し、昭和五十年七月六日七十六才を以ってご他界になりました。

茲に社会福祉関係者を中心として有縁の方々と共に、先生のご業績をたたえ、追悼の誠を捧げたく、「秦 隆真先生追悼論文集」を左記により刊行し、霊前に捧げたいと存じます。

何卒この趣旨にご賛同下さいまして、ご後援賜りますようお願い申し上げます。

秦 隆真先生追悼論文集刊行会代表

藤 原 了 然

### 記

一、追悼論文集「仏教と社会福祉」の出版

1 論文Ⅱ二〇〇字詰原稿用紙 五十枚位

2 随筆Ⅱ思い出、追悼文、その他(原稿用紙、ご随意)

約 四百頁 昭和五十二年六月刊行予定

二、原稿締切 昭和五十一年十二月二十日(郵送先 仏教大学仏教社会事業研究所)

三、霊前奉献 昭和五十二年七月 三回忌当日

四、協賛会費 一口五千円(論文集一部呈上)